

課題名	10 極早生温州の栽培技術の確立	分類	①
	(1) 極早生温州における枝別の全摘蕾や摘果による樹勢の維持と高品質果実生産		
試験研究年次	63~2年(完了)		
<p>I 目的</p> <p>極早生温州における摘蕾や摘果の方法が樹の生育や果実品質に及ぼす影響について検討し、樹勢の維持と高品質果実生産のための結実管理法を確立する。</p>			
<p>II 試験方法</p> <p>1 試験場所 山門郡山川町立山 現地圃場並びに場内果樹圃場</p> <p>2 供試品種 山川早生(高接ぎ樹)</p> <p>3 処理方法</p> <p>摘蕾 63~2年の5月上旬に樹冠内の側枝に着生している蕾や花を全て摘除し、新梢発生を促した。処理は1樹当たり直径1cm前後の細枝を5本、10本、15本、直径1.5~2.0cmの太枝を5本、並びに無処理とした。</p> <p>摘果 同年7月上旬に葉果比25となるよう樹冠内を間引摘果した区と直径1cmの枝別に結実枝と無結実枝を設ける枝別摘果を行った。なお、枝別摘果区の樹冠内葉果比は、間引摘果と同様に25となるよう調整した。また、8月上旬には両区ともに特に大きい果実や小さい果実の間引きを行った。</p>			
<p>III 主要成果の概要</p> <p>極早生温州では、枝別の全摘蕾処理によって新梢の発生を促して樹勢の維持が図れる。また、枝別交互の全摘果により果実品質が向上する。</p> <p>全摘蕾処理は樹冠内に直径1.5cm前後の枝5~10本を目安とし、着花量の多少や樹勢により加減する。</p> <p>1 枝別の全摘蕾処理は、摘蕾数に応じて新梢の発生数が多くなる。</p> <p>2 枝別の全摘蕾処理後に発生する新梢数は処理樹の着花量の多少によって異なり、着花量が多い場合は新梢の発生数が少ないので、全摘蕾処理を実施する枝数を多くしたり、処理枝を大きくする。</p> <p>3 枝別交互の全摘果は、慣行の間引摘果より果実の肥大はやや劣るが着色や糖度が高くなる。</p>			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 摘蕾の程度と新梢の発生(場内試験) (63年)

摘蕾程度 枝の本 大きさ	摘蕾数			摘蕾後 新梢 新葉		1樹当たり1果 収量			
	直花 本	有葉花 花	計 花	数 本	数 葉	果数 個	重量 kg	平均重 g	
細枝	5	945	150	1,095	165	630	389	34.4	88
細枝	10	1,200	210	1,410	242	966	369	34.1	92
細枝	15	1,515	330	1,845	239	903	342	31.9	93
太枝	5	1,925	305	2,230	362	1,542	299	30.6	102
無処理	-	-	-	-	-	-	382	37.7	98

注) 摘蕾数や摘蕾後の新梢発生数は1樹の処理全枝当たり。

第2表 着花量の多少・摘蕾の程度と新梢の発生(現地試験)(1年)

着花 量の枝の 多少	摘蕾程度 枝の本 大きさ	摘蕾数			摘蕾後 新梢 新葉		樹容積当たり 収量		
		直花 本	有葉花 花	計 花	数 本	数 葉	果数 個	重量 kg	
中	細枝	10	1,300	250	1,550	270	900	56	6.3
	太枝	5	910	305	1,215	185	610	40	4.4
多	細枝	10	1,760	160	1,920	60	280	70	5.7
	太枝	5	2,115	125	2,240	145	455	58	4.4

注) 摘蕾数や摘蕾後の新梢発生数は1樹の処理全枝当たり。

第3表 摘果の方法と果実の収量、階級別割合並びに果実品質

摘果 方法	1樹当たり収量1果			階級別割合					着色 程度	糖 度	可溶性 固形物	クエン 酸	甘味 比
	果数 個	重量 kg	平均重 g	2S	S	M	L	2L					
間引摘果	593	56.5	95	9	28	34	22	7	4.0	9.0	9.7	1.0	9.7
枝別摘果	576	50.9	88	12	38	36	12	2	4.9	9.4	10.1	1.0	10.1

注) データは、63~2年の平均値、毎年10月10日前後に分析

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 極早生温州の樹勢維持並びに品質向上のための結実管理法として活用できる。
- 2 樹や年により着花数や果実の肥大が異なるため、生育状況を見ながら結実量を調節する。

VI 今後の研究上の問題点

極早生温州における樹勢維持のための着花(花芽分化)調節法

VII 資料名

- 1 63~2年度福岡県農業総合試験場果樹関係試験成績書
- 2 2年度常緑果樹関係試験成績概要集(農林水産省編)
- 3 福岡県農業総合試験場研究報告B(園芸)第10号